

今日のシライ中

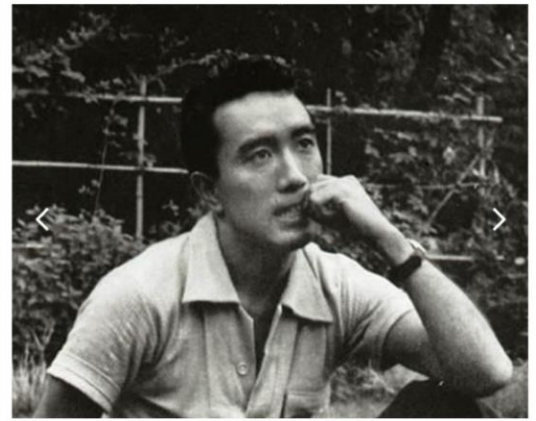
本の翼

白井中学校図書室から VOL.30

作家、三島由紀夫。聞いたことありますか？ノーベル文学賞の公開された資料には、当時、「日本で一番ノーベル文学賞に近い作家」とされていました。その三島由紀夫が亡くなってから、今年で50年になります。そこで、今回は、三島由紀夫と、太宰治の作品を紹介します。

『金閣寺』 など/文豪ナビ 三島由紀夫

「文豪ナビ」、というシリーズ、手に取ったこと、ありますか？このシリーズは、有名な作家の有名な作品を、ダイジェスト版で紹介する、文学作品入門にもってこいのシリーズです。三島由紀夫の巻、表紙には「時代が後から追いかけた。そうか！早すぎたんだ」とあります。端正で美しい文体と、ドラマチックな題材で、今も昔も読者の心をとらえる作家の一人です。代表作の一つ「金閣寺」は、「金閣を焼かなければならぬ」という、有名なフレーズが印象的な作品です。金閣の普遍の美しさに憧れ、それ

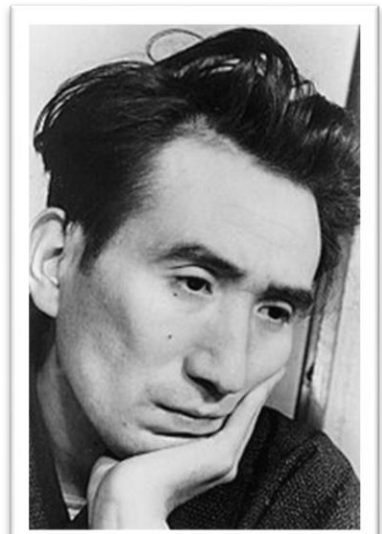


故金閣を焼かなければならない。と強く思う吃音の徒弟。屈折した愛憎の焰の揺らめきは、今も色あせることはありません。作品が舞台化されることも多い作家です。

(近年では、宮本亜門さんが、「金閣寺」をオペラとして上演しています。)

『人間失格』 など/文豪ナビ 太宰治

さて、なぜ太宰治なのか？それは、この二人には有名な因縁があるからです。三島由紀夫がまだ学生で、ぽつぽつ作品を書き始めた頃。知り合いのついでで太宰治を囲む会に出たときの話です。信奉者に囲まれてお酒も入った太宰に三島由紀夫は面と向かって「僕は太宰さんの文学は嫌いなんです。」と言い放ちます。この二人、一見水と油のように見えますが、見方を変えれば、結構似た者同士のところがあるように思います。なんといっても、二人とも、相当のナルシストです。似ているからこそ反発しあうのかもしれませんが。さて、表題の「人間失格」近年はビジュアル系のきれいな表紙で販売されていますが、そうでなくても常に新たな読者を魅了する作品です。



「恥の多い生涯を送って来ました。」という有名な書き出しで始まる本編は、「私のために書かれた作品だ！」「私のことが書いてある作品だ！」と若者の心をつかみます。好き嫌いのはっきり分かれる作家です。いつか読んでくれたらうれしいです。